

PROUD BLUE

09

2021/12

FEATURE | pp.02-15

内田 青蔵 教授

工学部 建築学科
日本近代建築史、日本近代住宅史

趙 衍剛 教授

工学部 建築学科
耐震工学、構造耐震安全性評価、リスク管理

六角 美瑠 教授

工学部 建築学科
建築デザイン

大庭 三枝 教授

法学部 自治行政学科
国際関係論、国際政治学、
アジア国際政治、地域統合・地域主義研究

灘山 直人 准教授

経済学部 現代ビジネス学科
国際ビジネス論、組織戦略論

北岡 祐 准教授

人間科学部 人間科学科
運動生理・生化学、トレーニング科学

関口 博巨 准教授

国際日本学部 歴史民俗学科
日本近世史、古文書の整理と修復

LABS | p.16 アジア研究センター

A NEW HOPE | p.17 9

雨宮 有里 博士後期課程3年
人間科学研究科

SPECIAL INTERVIEW | pp.18-19

武内 道子 名誉教授

理論言語学

TREASURE | p.20 国策紙芝居

Seizo Uchida

1953年、秋田県生まれ。1975年、神奈川大学工学部建築学科卒業。1977年、神奈川大学大学院工学研究科修士課程建築学専攻修了。1983年、東京工業大学大学院理工学研究科博士課程建築学専攻満期退学。1986年、工学博士。埼玉大学教育学部教授などを経て、2009年、神奈川大学工学部建築学科教授。

プライバシーとは “奥まりたるところ”

日本で最も権威があるとされる日本建築学会賞を、内田は2017年、『わが国の住宅の近代化に関する一連の歴史研究』という論文業績で受賞する。明治以降の日本の住宅の歴史を「洋風化」という視点から多角的、多層的に描いた革新的な研究だ。快挙である。しかも驚くのは、その論文を貫く発想が、すでに彼が大学生の時に生まれていることだ。

「卒業したら田舎に帰って小さな設計事務所を開いて、住宅の設計で身を立てようと考えていました。そのためには住宅についてのきちっとした知識が必要だろうと。その時、ひょっとしたら住宅の歴史を勉強することが、未来の住宅を考えることにつながるんじゃないかと思ったんです」

歴史といっても竪穴住居とか寝殿造とか、そんな大昔のものではない。明治以降の近代である。

「4年のゼミで日本の近代の住宅の研究を選び、明治時代に出版された建築関連の雑誌を

読み始めたのですが、まずプライバシーという言葉がいつから使われ始めたのが気になりました」

現代ではプライバシーという概念は住宅設計においては欠かせない。でも、いったい誰が日本で最初にプライバシーなる考え方を取り入れて住宅を設計し始めたのだろう。

「わかったのはそれが明治20年代後半だということ。『奥まりたるところ』と訳されていて、『プライバシー』とルビが振られていました。そんなふうには研究を続けていくと、これまで誰も本に書かなかったようなことがわかっていく。自分が見つけたことを、それが取るに足らないことかもしれないけれど、きちっとまとめて多くの人が利用できるようにしておくこと。それが自分の義務かなと思ったんですね。なにかしら、自分だけが見つけた世界のような喜びもあり、それをみんなに伝えたいなど。それで研究の世界に入ったんです」

“洋風化”とは洋館の “和風化”だった

建築史は様式の歴史や技術の歴史として語られることがほとんどであり、工学系の世界では社会学的、民俗学的な視点は大事にされてこなかったという。だが内田は、住宅は人々の生活が営まれる場であり、様式が変わったから生活が変わったのではなく、生活が変わったから様式が変わったのだと考える。「建築には美しさ、災害などに耐えうる力学的、材料的な要素などが必要とされますが、やはり人間がそこで安らかに過ごせる空間を

FEATURE

住宅の歴史から 建築の未来が見える

住まう人間の思いという視点から様式や技術に偏っていた建築史を革新。スクラップアンドビルドは終わり、キープアンドチェンジの時代がやって来る。

内田 青蔵 教授

工学部 建築学科

日本近代建築史、日本近代住宅史

作るということが最大の目的ですから、その時代の人々はどんな住宅建築が居心地よいと感じたのか、設計者はどんな生活をしてほしいと願ったのか、そういう理念を探ることが重要です。それが工学系ではあまり語られてきませんでした」

たとえば先ほどのプライバシーだ。西洋から入ってきたこの新しい概念、新しい文化を、音が筒抜けなのが当たり前だった家に住んでいた当時の日本人はどのように受け取り、どう建築に取り込んでいったのか。そのことで日本の住宅はどう変わっていったのか。そんな視点が大事ではないかと内田は考えたのだ。それは近代化によって大きく変化していった日本人の意識と建築との相関を描き出す壮大な試みでもある。そして内田の選んだ視点の一つが「洋風化」だった。

「最初に日本の住宅の洋風化を推し進めたのは、大学教育を受けた中流層の人たちでした。彼らは日本の伝統的な住宅は時代遅れと考え、ヨーロッパやアメリカの住宅をモデルに洋風の住宅を作るわけです。ところがそれまで畳に蒲団をしいて寝ていた人たちが、突然ベッドで寝ても寝心地が悪い。すると彼らは洋室に畳を敷く。特に大正時代だと女性はまだ着物を着ていましたから、畳がないと着物がたためませんし。つまり、洋館の中にそれまで否定していた和風の要素を再び取り入れることで生活の場を作りあげていった」

明治以降、急速に資本主義化されていく日本社会で、さまざまな階層や新しい価値観が生まれていく。それに伴って生じる建築家や建築産業の大きな変化。そして西洋への日本人の複雑な眼差し。それらがどのように絡み合っていたのか。内田の研究はそのダイナミズムを、住宅を通じてあらわにする作業でもある。日本建築学会賞の授賞理由に「明治以降の我が国の住宅の近代化過程を、社会・生活・形態・技術の相互連関する状況から読み解いた一連の論考である」と記される所以だ。

美しいものが人間を豊かにする

内田は現在、建築学会で「和室を世界遺産にしよう」という活動に携わっている。それ

は日本の伝統的な畳文化を見直そうという取り組みでもあるが、内田がこのところ唱えている「キープアンドチェンジ」という考えと響き合うものでもある。

「現代社会を造りあげてきたキーワードの一つがスクラップアンドビルドですが、その時代はすでに終わり、これからは今あるものをどのように有効活用するかという時代だと思うんです。それをキープアンドチェンジと僕は勝手に名づけているのですが、古い建築は壊さずに維持して必要な人が利用すればよい。建築家には、新しい作品を作るだけでなく、今ある建築の魅力やどのような思いで作られたのかを読み取り、それらを再び人々に伝えていくことのできる能力が求められていると思います」

若い世代が農村の古民家や京都の町家に惹かれ、それらを改造して住む。それもキープアンドチェンジである。

「彼らにしてみれば、古民家や町家も伝統的な文化というよりも、むしろ現代的な魅力として映っているのかもしれない。ひょっとすると、畳がない和室というものも彼らにとってはありうるのかもしれませんが。それでもいいんです。これまで脈々と培われてきたものが残り、古いものを活用していくという文化が芽生えていくのであれば」

そもそもなぜ建築を選んだのかという質問に、内田は絵描きであった父親の影響を挙げた。

「美しいものが人間を豊かにするということを、絵を描いている父親の姿から子どもながらに知ったからかもしれませんね。父親からは、『お前は絵が下手だから、絵ではメシを食うなよ』と言われましたけど」と内田は顔をほころばせた。



最初の著書『あめりか屋商品住宅—洋風住宅開拓史』(住まいの図書館出版局)をはじめとした内田の著作。

昭和7年に建てられた洋館、旧本多忠次邸を東京から岡崎市に移築保存する際に、学生と一緒に実測して作成した細部がわかる手書きの建築図面。当時の住宅の洋風化について、調査で得られた貴重な資料だ。



Zhao Yangang

1963年、中国山東省生まれ。1984年、山東科学技術大学土木工学科卒業。1987年、中国地震局工程力学研究所地震工学専攻修士課程修了。1996年、名古屋工業大学大学院社会開発工学専攻博士後期課程修了。名古屋工業大学工学部准教授、University of California, Irvine校文部科学省在外研究員を経て、2009年、神奈川大学工学部教授。

人間がすることに絶対はない

13歳の頃、故郷の中国で唐山地震を経験した。家は震源地から離れてはいたが、揺れを感じて恐ろしかったという。

「この1976年の唐山地震では24万人以上の人が亡くなりました。当時はまだ中国は建築耐震のレベルが低かったので、レンガ造りの

建物が多く、それがたくさん崩壊したのですね。日本は地震国で世界のマグニチュード6.0以上の地震の2割が日本で起きています。中国は日本ほどではありませんが、それでも大きな地震にたびたび襲われている国です。しかもいったん発生するとその人的被害は日本とくらべるととても大きい。ところが、日本は地震が多いわりには他国とくらべると人的被害が小さく抑えられています。つまり日本の耐震技術は間違いなくとても高いんです」

中国の大学で耐震工学を学んでいた趙が日本にやって来た理由は、その日本の先進的な耐震技術を学ぶためだった。そして気がつけば、もう30年もここ日本で研究者生活を続けている。

耐震技術は大きくハード面とソフト面に分かれるという。建築構造に使用する部材や構造を強靱にするのがハード面だ。一方のソフト面は構造系が持つ不確実性という現象を相手にするものであり、それが趙の専門分野である。

「建物は将来的な環境をいろいろ想定しながら設計されます。でも、いったん完成したあとは、やはり想定した環境と実際の環境の間にはギャップが生まれてしまいます。たとえば材料の劣化であるとか、想定外の荷重とか、施工不良というのがあります。地震もそうです。そういうものを我々は不確実性要因と呼ぶのですが、いくら頑張っても、ときにそういう不確実な要因によって建物は壊れるのです」

趙によれば、構造系が抱える不確実性によるリスク・ポテンシャルを測定し、安全性を目に見える数値などで評価しようという動きが今の世界的な流れなのだという。

「これまでは法律などで決められた個々の許容値を超えなければ安全とする考えでしたが、人間がすることに絶対というものはないのです」

とてつもなく複雑で難しいこと

趙の研究には確率などの数学的要素が大きく関わってくる。それは建築という複雑なシステムが持つリスク、あるいは安全性を、設計者が直観的に理解できる数字などのシンボ

FEATURE

安全な建築という夢を追って

少年のときに中国で体験した大地震。耐震技術に優れた日本に興味をわいた。地震に立ち向かえる建築を目指しリスク評価のモデルの探求に没頭する。

趙 衍剛 教授

工学部 建築学科

耐震工学、構造耐震安全性評価、リスク管理

ルで表現することを彼が追い求めているからだ。

「リスク・インフォームド (risk informed) と言うんですが、その建物は完成後、ある一定期間のあいだに破壊する可能性はどれくらいか、破壊したらどれくらいの社会的なリスクを生じるのか、それらをすべて定量的に把握しながら設計しなければならないという考え方です。これが理想です。私が今力を入れているのが、そういった基礎的な耐震設計のあり方なんです。リスク・ポテンシャルを定量的に把握しながら、いかに構造物の設計をすればよいのか。リスク、つまり不確定性は人間社会にはつきものです。今日は雨が降るだろうかと、天気予報を聞いて洗濯をすかどうか決めますよね。建築の世界も同じなのです」

言いかえれば、その建物の安全性を究極にまで高める設計のしかたを考えるとということだが、趙も言うように、それは最初から不確定さという矛盾を抱えている。つまり、予測し得ないことがある以上、絶対はない。だが、どれくらい危険か、逆に言えばどれくらい安全かが客観的にわかれば、人間は備えができる。それこそが今考え得る最高の「安全」ではないかということなのだ。だが、その「安全性をあらかじめ客観的に測定すること」ほど難しいものはないのである。

「たとえば原子力発電所は、50年間の間にその破壊する可能性を100万分の1に収めなければならないという基準になっています。普通の建物の場合は50年間の間の破壊確率が1万分の1以下であればOKということになっています。しかし、その破壊の可能性を調べることは、実はとてつもなく複雑で難しいことなんです」

その「とてつもなく複雑で難しいこと」に挑戦しているのが趙の仕事なのだ。まさに予言者でもなければ不可能なことに思えるような話であるが、たとえば趙は「ばらつき」に着目する。

「全体的にその国の工業のレベルが上がり、品質管理がきちとなされれば、品質のばらつきは減っていきます。また、できるだけ多くの建物の部分を工場で作って、現場では組み

立てるだけにして作業時間を短縮することで、品質のばらつきは減るでしょう。でも私は、品質のばらつきを減らす方向だけではなく、ばらつきを可能な限り合理的に把握する方向も大事だと考えています。それによってリスクが正しく評価できるようになるからです」

リスクがゼロの建築は不可能

建築の世界は広いと趙は言う。

「たとえば建築の歴史や保存とか、また建築デザインとか。私の専門は構造ですけども、構造の中には荷重を専門とする先生もいるし、鉄骨構造を専門とする先生もいます。建築材料とか、建築施工とか、実にさまざまな分野があります」

趙が専門とする安全性評価の分野は比較的新しい。

「土木建築にそういう考え方をとり入れたのは、五、六十年前からですね。古いと思われるかもしれないけど新しいんですよ。飛行機の設計の場合にはもっと前、1920～1930年頃からです。アメリカで始まりました。私の夢は、建築構造安全性評価において、できるだけ簡単な手法を使って、設計者、あるいは普通の人々に理解できるようなモデルを開発することなんです」

建築のデザインをしたいという気持ちはないのかと聞くと、こう答えてくれた。

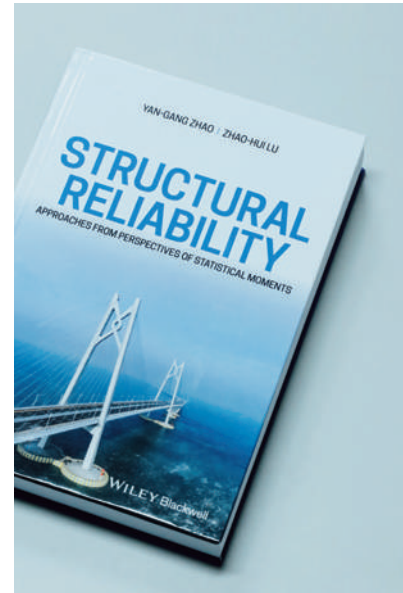
「若いときは、実務設計もしたいという夢もあったんですが、なぜかな、何か集中しないといけないうから、だんだん、研究ひと筋になってましたね。いまでは、実務設計を試みたいとは思わなくなりました」

大きな地震があれば常に被災地に赴き、建築物の被害状況を詳細に調査する。日本だけではなく、約7万人が亡くなった2008年の四川地震の際も何回も現地に駆けつけた。

趙は言う。

「建築においてリスクがゼロになることはありえません。不可能です」

だからこそ、趙の仕事が大きな意味を持つのである。



新著の『Structural Reliability: Approaches from Perspectives of Statistical Moments』(Wiley-Blackwell) は北京工業大学のZhao-Hui Lu教授との共著。建築物の構造信頼性について革新的なアプローチを提言したと評価されている。



2008年、日本で日本建築学会賞を論文部門において受賞。写真はそのトロフィーだ。

FEATURE

斬新な家のかけた魔法

建築家を父に持ち父が設計した斬新な家で育つ。
その家が少女にかけた魔法は
ある日、“風景の建築家”を生み出した。

六角 美瑠 教授

工学部
建築学科

建築デザイン

斬新な家

Miru Rokkaku

東京生まれ。2001年、筑波大学芸術専門学群建築デザイン卒業。2003年、東京藝術大学美術研究科建築修士課程修了。2003年、六角計画工房ミルアトリエにて設計活動を開始。2007年、東京藝術大学建築科教育研究助手。2014年、東京大学工学研究科建築専攻博士号取得。2016年、東京大学先端科学技術研究センター・生産技術研究所特任助教。2018年、芝浦工業大学デザイン工学部特任准教授。2021年、神奈川大学工学部建築学科教授。

高名な建築家であった父、鬼丈が若き日に自分たち若夫婦の住まいとして建てたのが「クレバスの家」である。建物の真ん中に氷河のクレバスのように裂けた吹き抜けの空間があり、そこには1本の巨大な大黒柱が立っている。六角は都内の住宅地にあるその斬新な家に生まれ育つ。

「家の中には象徴的な斜め上に吹き抜けた深い鋭角な空間（クレバス）があって、昼間は光が上部からグラデーションのように減衰しながら差し込んで、夜は深い闇が奥に奥に続

いていくようにも感じます。まさに陰影礼賛のようですね。小さな家ですが、奥行きのある距離感や視覚的な無限性が内包され、住宅スケールを超えた空間力のある建築でした」

もちろん、父が建築家であることの影響は大きいですが、何よりもこの斬新な家に暮らしたこと自体が、六角に建築家への夢をかきたてたと言う。

「子どもの頃、このクレバスの空間には、いつも勇気づけられていた気がします。学校でいやなことがあって家に帰ってきて、ぱっとドアを開けた途端、目の前に大黒柱と迫力あるパースペクティブな空間が一気に広がると、小さいことでよくよしても仕方がないという気持ちになるんです。家という生活感のある日常の中に非日常の空間が埋め込まれてることの大切さとその空間性にとても興味を湧きました」

外観のフォルムではなく、建物の中で何を感じるかという空間経験こそが重要であり、たとえば壁はただの仕切りではなく、光のグラデーションをはじめいろいろな現象をキャッチするスクリーンなのだ。そんな現在の六角の建築に通ずる考え方を、六角は自分が暮らす家から自然に学び取っていった。

風景を家に折り込むということ

それはアートなのか、実用物なのか。建築とはとても難しい領域だと六角は言う。

「建築は、屋根の下に機能性のある空間があれば成立します。住宅であれば、生活ができるスペースがあればいいと思われるかもしれませんが、でも、私は建築を作る上で、その土地や環境を読み、そこでしかできない建築のあり方を探りたいと思っています。加えて、芸術へと引き上げる空間性やコンセプトを作り込みたいと考えています」

六角のテーマは「風景」だという。とはいえ、それは窓を開けるといい景色が見えるといった「風景」ではない。

「風景の『景』を使った漢字には、春景、秋景とか、あるいは光景とか、いろいろな言葉があります。『景』というのはさまざまな条件の中、時間や空間と関連し、人の感性に響くような場面が立ち現れることだと思います。」



六角に大きな影響を与えた、父・六角鬼丈の設計になる自邸「クレバスの家」。ブランコに乗っているのは4歳の六角だ。

たとえば、ある瞬間に光が線的に差し込むような象徴的な空間であるとか、建築という一つの器が、環境のいろいろな要素を現象としてキャッチできるようなものになる。そして、そのような特別な場面を生活や活動の中で体験する。それが建築における『景』なのではないかと」

その発想は、六角が修士課程のときに設計した『ORU 折織居』という名の住宅です。山中に建つこの六角の処女作ともいえる家はその名の通り、あたかもたった1枚の紙を“折る”ようにしてすべての壁ができあがっている。

「森に囲まれた自然環境のよい場所に、都市中の箱のような建築を置きたくはありませんでした。そこで、その土地の方向性や環境を読み込みながら、木々の間に1枚の壁を幾度か折り込んで、その上に屋根を一つの面にかけて空間を作ってみました。折り込むことで壁の表裏が反転したり、折り込みの角度によって遠近感が強調されたりと、多様な場面を空間体験として、『景』を織り込むことを試みました」

それはまさに六角の暮らした「クレバスの家」からのインスピレーションともいえる。

茶室の空間性・世界観への憧れ

六角の家は工芸家の家系でもある。曾祖父の紫水は岡倉天心に学んだ漆芸家であり、祖父の大壤もまた漆芸家で東京藝術大学の教授を務めた（ちなみに六角が藝大の大学院にいたときは父・鬼丈が教授だった）。六角が細

部の美を意識する工芸的な視点を大事にするのは、そのためだろうか。

「近代の建築家のコルビュジェやイタリアのカルロ・スカルパの建築作品は、工芸的な見地からも素晴らしいと思います。彼等のようにディテールまで凝ってデザインできたらいいなと憧れます」

日本ではプリント合材やサイディングを使った既成品住宅が増えたことで、本物の素材を知らない若者が増えているという。かつては職人たちが取っ手一つにまで素材や細部をこだわり、工芸的な美にあふれた日本の建築であったのに、若者たちがマテリアルの質すら理解しないまま建築家になってしまうことを六角は恐れる。

「いま、研究室の部屋を学生と一緒に改修しているところなんです。丸鋸や電動工具を使って床を作るところから始めています。自分たちで漆を床に塗ってみたいしながら、素材のデザイン実験もしていこうと思っています。左官塗りなども職人さんに学んだりしながら学生と腕を鍛えて、コロナが収まったら地方の古民家改修などまちづくりプロジェクトにも発展させていきたいと思っています」

日本という小さな島国に多くのワールドクラスの建築家が育っているのはすごいことだと六角は言う。建築が芸術の表現媒体としてここまで認められ、創造され続けている国は少ないとも語る。

「私は茶室に関心があります。スケールを超えた世界観と五感を研ぎ澄まし茶を味わうことに特化した究極の空間が茶室です。茶室のように人の感性に響く空間を創造することができたらと思います」

クレバスの家に六角はいまも住む。自室はクレバスにある。「せっかくの休みの日でも、結局、クレバスの焦点を眺めながら建築のことばかり考えちゃってるんです」と六角は苦笑した。



六角の処女作といえる住宅「ORU 折織居」の外観と模型。壁が一枚の紙のように折り込まれているような構造になっている。

きっかけはテレビ、映画、 女性首相、そして冷戦終結

8歳にして平将門を描いたNHK大河ドラマ『風と雲と虹と』にはまって歴史が好きになり、高学年では歴史を論じる新書にも手を出した。そんな大庭を国際政治学へと誘った最初のきっかけ、それはアニメやテレビドラマ、そして映画だった。

「小学校の頃から本も好きでしたが、テレビっ子で、アニメも大好きでした。そのころガンダムが人気でしたけど、実はあれは内戦の話なんですよ。ガンダムに限らず、戦争や闘いをテーマとしたアニメってあのころたくさんあって、よく見てましたし、政治や世界情勢がテーマのテレビドラマや映画も好きでした。そして同様のテーマの本を読むように。たとえば映画『二百三高地』を観た後に原作を読むとか。マンガも好きで、歴史や国際情勢を扱ったのをよく読んでました」と大庭は懐かしそうに笑う。

「リアルの世界では、中学生の頃、フォークランド紛争が起きました。イギリス初の女性首相であるサッチャーがアルゼンチンの同島の侵攻に対して武力の行使を持って応じたということにすごく興味を持って、フォークランド紛争の新聞記事を切り抜いてスクラップしていました。また、イギリスという先進国が関わる戦争を目の当たりにして、改めて世界を動かす仕組みというものにとっても興味が湧きました」

その後、歴史か国際政治かどちらを専攻するか決めかねつつ大学に進学。転機は3年の時。ベルリンの壁が崩れ、冷戦が終結。「世界が大きく変化していく。やっぱり国際政治は面白い」と、専攻は決まり、卒業後は東大の大学院へ進学、国際関係論を学ぶ。と、こうして大庭の研究者としてのキャリアが始まるのである。

戦争映画が教えてくれたこと

大庭の専門はアジアにおける地域主義、地域制度、あるいは地域統合とよばれるものだ。端緒は大学の卒論に遡る。

「第二次世界大戦後、アメリカやイギリスなどが中心となって、『太平洋協定』を締結しようという動きがありました。日本やフィリピン、オーストラリアも加えて、アジア太平洋に位置する多くの国が参加する安全保障体制を構築しようという構想でした。結局、頓挫するのですが、その顛末をテーマに卒論を書いたんですね」

この頃から複数の国が同じ「地域」にいるということを理由として、対立しつつも協力を志す地域主義や地域統合という政治的営みに興味を持つようになった。当時は1989年のアジア太平洋経済協力（APEC）設立を皮切りに、冷戦終結後の国際環境の変化の中で、アジア太平洋でも地域主義が盛り上がりつつある時期だったのも追い風となった。

Mie Oba

1968年、東京都生まれ。1991年、国際基督教大学教養学部卒業。1994年、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了、2002年、東京大学博士（学術）。日本学術振興会特別研究員（PD）、東京大学大学院助手、ハーバード大学研究員、東京理科大学工学部教授などを経て、2020年、神奈川大学法学部・法学研究科教授。



FEATURE

自分が生きる 世界の仕組みを知る

少女を歴史好きにしたのは大河ドラマ、マンガやアニメは歴史や国際政治への関心のきっかけに。ベルリンの壁が壊れ、世界が変わるのを見て彼女は研究者を目指す。

大庭 三枝 教授

法学部 自治行政学科

国際関係論、国際政治学、アジア国際政治、
地域統合・地域主義研究

「アジア太平洋は非常に広い範囲を含む地域概念です。そこには多様な国が存在し、さまざまな利害が錯綜しています。それらを一つの『地域』とくくることがそのものが無茶なことなのに、そこで協力が進められようとしている。なぜわざわざそんなことをしようとするのだろうか。そもそもどういう経緯でそんなことをすることになったんだろう。こうした興味から、アジア太平洋地域主義の研究を本格的に始めたんです。この広域の『地域』を舞台とした協力の動きの紆余曲折をずっと追う中で、今メディアにもよく登場するTPP（環太平洋パートナーシップ協定）やRCEP（東アジア地域包括的経済連携）の研究も進めています。

また、アジア太平洋よりもっと広く、多様な領域を含んでいる『インド太平洋』が一つの『地域』として認識され、そこで各国のさまざまな政治的動きが展開しています。どうしてそういうことが起こっているのか、これらの動きが今後の我々の生きる世界にどういう影響を与えるのか、を考えるのもとても面白いですね」

アジアを専門とするにあたってはもう一つ、強い思いがある。

「日本は米英と戦った太平洋戦争のみならず、同時に日中戦争、東南アジアへの侵攻といったアジアにおける戦争も引き起こしています。特に東南アジアを軍政下において多大な被害を与えた事実は日本社会であまり記憶されていない。問題だと思っています。こうした歴史認識に関わる研究は私の専門ではないのですが、多くの先達や現役世代の方々の研究蓄積から学びつつ、授業でもよく取り扱うテーマですね」

自分事として 国際政治をとらえること

そして何より、自分事として国際政治をとらえること。これが大庭の信条である。

「自分が生きる世界は自分の半径数m以内で閉じられていない。その人が意識してようがしてまいが、もっと広く、いろんなものが絡む複雑な仕組みの中で人は生きている。国際政治は遠い世界の出来事では決してない。自

分を取り巻く環境の重要な一部なのです。

新型コロナの流行で一時期、人の移動が止まり、グローバル化にブレーキがかかったかのように見えました。しかし実はモノやカネが国境を越えて動く様は変わらなかった。そしてコロナ後には人の移動も徐々に復活するでしょう。世界中の国々の社会が国境を越えて結びついて連動する度合いが強まっている。そうした中で、個々の人々の生活や人生に、国際社会のあり方や国際政治の動きがいつそう大きく影響するようになってきている。その一方で、自分たちの行動や選択、それらも実は国際社会のありように影響を与える。多くの人に、そんな視点から国際政治に関心を持ってほしいなと思います」

趣味は料理。肉を仕込んで長時間火にかけた鍋から美味しそうな匂いが漂ってくる中で、論文や本を読んだりすることもある。

「料理って、よい食材を集めてきて、うまく調味料を使ったり、煮込んだり焼いたりと適切に手を加えつつ、食材を生かして美味しく仕上げるものですね。よい材料を集めてきて、適切に検証や分析をして、自分なりの結論を出して論文などの成果につなげるという作業、料理と通じるところがあるんじゃないかなと思っています」

料理好きな理由は「食いしん坊だから。間違いないです」。そう言って大庭は笑う。



大庭の著書。左から『東アジアの地域主義と、地域主義とは何か。アジアにおける「地域」の形成と、アジア太平洋地域の形成』(千倉書房、編著)、『重層的な地域としてのアジア』(有斐閣、単著)、『アジア太平洋地域形成への道程』(ミネルヴァ書房、同じく単著)



研究にはさまざまな一次資料、自ら行った関係者へのインタビュー、報道資料などを用いる。写真は日本の外交史料館やオーストラリアの資料館から取り寄せた資料、また日本政府への資料公開請求という手段で取り寄せた資料。

Naoto Nadayama

コンサルティング企業で勤務後、2008年よりフィンランド、アアルト大学に留学。修士課程修了。アアルト大学BIT研究所の研究者として勤務。ニュージーランド、オタゴ大学で博士課程修了。2017年、神奈川大学経済学部助教、2019年、神奈川大学経済学部准教授。

仕事に没頭して働いた20代

そもそもはスーパーマーケットの魚売り場から始まった。

「大学を卒業して就職したのがスーパーを営んでいる企業で、魚売り場に立って魚をさばっては販売していました。そこでマネージャーがやり方を変えて売り上げを伸ばしたりするのを見ては感嘆したり、自分なりにいろんな問題意識のようなものが湧き上がってきたりして、これは企業の経営を改革するという仕事のほうが自分にとって面白いんじゃないかと思ったんです」

1年で退社するとコンサルティング会社に転職、大企業を相手にマーケティングから組織改革、IT戦略までさまざまな提案をしては変革を手伝うという仕事に没頭する。

「刺激的で面白い経験でしたが、土日もなくコンサルティングの仕事に没頭する暮らしでした。それが日本企業の強みで原動力だからと思っていましたが、働き方等に疑問を感じる時もありました」

そんなとき、たまたま世界経済フォーラムの国別競争力レポートを目にする。2005年

のことだ。1位はフィンランドだった。

「日本はこんなに頑張っているのに12位、それなのに1位のフィンランドではみんな夕方5時には帰宅して、夏休みは3週間もある。これはどうしてだろうと疑問に思いました。そのころ、夜間の大学院に通っていたのですが、そこでフィンランドのことをいろいろと調べるうちに、どんどん関心が深まっていきまして、ついに、当時結婚した妻に頼んで新婚旅行の行き先をフィンランドにしてもらったんです」

その目で直に見たフィンランドに灘山はたちまち魅了された。

「ここに住んでみたい。そうすれば何かが変わるんじゃないか。企業戦略や組織変革ということに強い関心がある自分にとって、想像もつかない面白い何かがここにあるんじゃないか。そう思いました。それでフィンランドの大学院に行くことを決めたんです」

8年間勤めた会社を辞めるに際しては周囲に批判もあった。だが、まったく躊躇はなかった。覚悟を決めての留学だった。

フィンランドでの研究生活

ヘルシンキのアアルト大学の大学院で国際ビジネス論の研究を始めるが、もともと研究だけをするつもりはなかった。

「フィンランドの企業で働きたいという思い

灘山 直人 准教授

経済学部
現代ビジネス学科

国際ビジネス論、
組織戦略論



FEATURE

実務的視点と 学術的視点の間で

ふと目にした国別競争力ランキングで1位の座にあったのはフィンランドだった。若いビジネスマンは思った、フィンランドに行こう。そして一人の経営学者が誕生した。

もあり、すぐにアプローチを始めました。やがて、フィンランドでは企業の改革プロジェクトは大学と連携して行うことが多いことを知り、大学の研究者に対して、企業を巻き込んだ大きなプロジェクトを国の予算で行いたいと提案するやり方に途中から変えたんです」

最初は賛同してくれるフィンランド人研究者が見つからず苦労したが、やがて賛同者も現れ、国の公募に応募し続けた結果、2年目にしてついにプロジェクト受注に成功する。流通小売企業のイノベーションがテーマで、フィンランドの百貨店、コンビニ、アパレル企業が参加した。大学の研究員という立場でこのプロジェクトでコンサルティングの仕事を続けながら、灘山は博士課程へと進む。外国人に対しても学費は無料というフィンランドの制度にも助けられた。

「そのころヘルシンキにある日系企業の子会社でも働きはじめました。このときに指導教授が、おまえ、そんな面白いことをしているなら、そこで経験したことすべてをドキュメントも含めてデータを取って、それをベースに論文を書いたらどうだと言うんですね。そこから、少しずついろんなことを研究のほうに寄せていきました」

2014年には、指導教授とともに灘山はニュージーランドのオタゴ大学に移る。

「そこで3年、講師をしながら、奨学金もありましたので、それでなんとか食いつなぎながら、研究に没頭しました。仕事の中心軸が学術的な世界へと移って行って、そのころにはもうコンサルティングはしていませんでした」

帰国した灘山は2017年、神奈川大学に赴任する。

経営学は誰のために？

経営学というと、人によっては企業の営利追求を助けるための技術論、組織論という印象があるかもしれない。だが、灘山はこう言う。

「経営学は社会科学の一部です。つまり、社会の中にある仕組み、現象の本質を解き明かしていく学問なんです。文化人類学や言語学にそれぞれの対象があるように、経営学はた

また企業を対象としてフォーカスしているということなのですね。ただ、その知見を社会科学として位置づけることが大事だということと、企業・実務家たちに貢献することが大事だという考えがあり、そのバランスをどう取るかが経営学の難しいところですね」

現代では、学術的な位置づけを重要視する伝統的な立場をモード1、学術研究者と実務者が共同で知識創出を行うことに重きを置く立場をモード2と呼び、問題意識として共有されているという。

「もともとヨーロッパは哲学と科学の伝統があるのでモード1の意識が強いんですが、フィンランドはモード1とモード2をいかにバランスさせるかということを考えている国なんです。フィンランドはモード2だけでは絶対駄目だと考えてはいても、やっぱり企業に還元していかないと社会はよくならないという考えから、意図的に大学研究者と企業をマッチングさせる仕組みを作っているんですね。たまたま私はそれを知らないままその仕組みに乗っかることができたんですが、企業の人に貢献をしながら学術研究をするというこのバランスをどうしていくかというのは、とても考えさせられました」

灘山本人は現時点ではモード1の姿勢で研究に邁進する。研究者はモード1に軸足を置き、学術的知識の創出に努めるべきという。ただひたすら、自らの研究を国際的なレベルへと高め、世界に影響を与えるものへと磨き上げることが目下の使命と考えているのだ。とはいえモード2を否定するわけではない。かつての実務経験は今も研究の糧になっている。実務的視点と学術的視点の間を、これからも行き来していくのだろう。

最後に灘山は、自分がそうであったように、若者には日本で行き詰まったなら海外へ出てみたいという語る。

「日本はもっと多様であっていいし、みんなが同じように固まる必要もないし、もっと自由さがあっていいんじゃないでしょうか。自分を成長させるということを考えて生きていけばいいし、海外に出ていくことが私のように何かが変わるきっかけになるかもしれません」



研究アイデアやメモ、大事な文献の抜き書きなどが記録されたノート。灘山が10年以上にわたって書きためてきたもので、すでに20冊以上になる。必要があれば読み返し、いまま書き続けている。



ニュージーランドのオタゴ大学にて。書き上げた大部の博士論文を提出する灘山。

アスリートを 科学する

自らも陸上競技に取り組んできたからこそアスリートのからだの神秘に果敢に挑む。科学の最先端をスポーツの現場につなげること。それが彼の夢である。

北岡 祐 准教授

人間科学部
人間科学科

運動生理・生化学、
トレーニング科学

Yu Kitaoka

2007年、大阪大学理学部生物学科卒業、2009年、東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻修士課程修了。2012年、筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻博士後期課程修了。博士（学術）。日本学術振興会特別研究員、東京大学大学院総合文化研究科助教を経て、2017年、神奈川大学人間学部准教授。

競技者から研究者に

物心ついた頃からずっとサッカーに夢中だった北岡少年は、中学生になると自分は記録にかける個人競技のほうが向いていると思い、陸上を始める。足の速さには自信があったのだ。学校の体力テストをきっかけに1500m走に取り組むと、すぐに地域の大会で優勝した。一気にのめり込んだ。

「長距離は練習量が多くて大変なので、強度は高くても時間が短く済む中距離のほうが好

きでした。大きな大会で勝てるような選手ではありませんでしたが、陸上競技は自分の記録が伸びていくのが見えるから面白いです」

以来、北岡はトラックを走り続ける。

「大学の時は、授業や実験の合間に時間を見つけてはとにかく走る、練習時間を確保することばかり考えている生活でしたから、周囲はヘンな学生と思っていたでしょうね。高校の時は800mの記録が2分ちょうどだったので、大学では2分を切るのが目標でした。受験のブランクもあって2年生の時に札幌で行われた大会でようやく達成でき、その後も少しずつですが自己記録を更新していきました」

大学では発生生物学の研究室に所属し、しだいに研究者として歩むことを意識し始めるようになる。

「でも、自分は将来どんな研究をしたいのか、かなり悩みました。他の同級生と同じようにそのまま進学して卒研のテーマを続けるのか、それとも別のことに挑戦するのか。卒研を進めているうちに、生物学の知識なり技術をスポーツに生かせないだろうかと思うようになりました」

4年生の夏休みに、これまで全く学んだことがなかったスポーツ科学の勉強に取り組み、大学院入試に合格する。運動生化学——それが北岡の選んだ研究分野だった。

「今はもう変わってきましたが、当時は分子生物学を勉強した学生がスポーツ科学を研究するという例はあまりありませんでしたので、その点はプラスだったかもしれません」

乳酸は疲労物質ではない

北岡の研究テーマの中心となるのは乳酸である。いまだ多くの人が乳酸を疲労物質と思い込んでいる。運動をして疲れるのは乳酸がたまるからであると。

「男子のトップアスリートは100mを9秒台で走ります。200mでは19秒台。でも、400mだと世界記録でも43秒台、800mでは1分40秒もかかります。ダッシュのスピードで走り始めると30秒ももたず、急激に速度が落ちる。からだの中で何らかの変化が起きている。それは何か知りたかったのです」

大学院生時代から、北岡は競走馬を用いた

研究プロジェクトに参加してきた。一般的に実験動物として用いられるマウスやラットに高強度の運動を課すことは困難であり、かといってヒトのアスリートの筋サンプルを取るような研究を行うのも難しいが、サラブレッドなら可能だった。

「レース中のサラブレッドでは、ヒトよりもずっと血中の乳酸濃度が高くなります。乳酸は糖を分解する際にできるので、乳酸濃度が高いというのはそれだけ素早くエネルギーを作っているということなのです。さらに、乳酸は最終の代謝産物ではなく、状況によってはエネルギー源になっていることもわかってきました」

細胞内のミトコンドリアが酸素を使って糖や脂肪からエネルギーを作り出すプロセスを酸化系と呼ぶ。日常生活やジョギングなどのいわゆる有酸素運動では、酸化系によるエネルギー産生にほぼ依存している。一方、ダッシュなどの急速に大量のエネルギーを必要とする運動時には、酸化系だけでは供給が間に合わず、ミトコンドリアで酸化できる量を超えて糖が分解される。乳酸はこの酸素を必要としない、解糖系と呼ばれるプロセスで作られ、大量に乳酸を産生することでトップスピードを数分間も維持できるというわけだ。

「わたしたちのからだには乳酸を作る能力と使う能力があり、測定できる乳酸のデータはその差分であることに注意が必要ですが、高強度の運動では乳酸を作る能力のほうがパフォーマンスに深く関係しているのです」

運動による 身体適応の謎を解き明かす

ヒトの体内に蓄えられている糖質は、筋肉と肝臓を合わせてもおよそ2000kcal程度と限りがある。糖を使い切ると、運動のペースを維持できなくなる。たとえば、それがマラソンの“30kmの壁”だ。

「前半は余裕で走っていても、エネルギーが足りなくなる後半はペースが落ちてしまう。長距離の種目では、レース中のペースの変動は極力小さくして糖を温存する、つまり乳酸



分子生物学研究に欠かせないツールであるリアルタイムPCRシステム。運動能力に関わる遺伝子発現の定量や遺伝子型の判別ができる。

はできないほうがいいです。一方で、乳酸を作れなくなってしまうと、ペースのアップダウンに対応できないし、ラストスパートで負けてしまいます。それでは乳酸は良いものなのか悪いものなのか、簡単な答えを求める学生たちは少しこңがらがるようです」と北岡は笑う。

カナダ留学時に北岡が研究したのは、マッカードル病という難病であった。骨格筋に貯蔵された糖の分解ができないという遺伝性疾患で、日常生活の動作ではほとんど問題はないが、急に走り出したり、階段を駆け上ったりという激しい動きができない。この病気の患者の体内では乳酸が作られないのである。

運動中の体内ではいったい何が起きているのか。乳酸にとどまらず、その謎すべてが北岡のターゲットである。そして自ら競技者でもあった北岡は、その研究の成果を多くの人々のトレーニングに役立てたいと願う。

「運動後の筋肉ではどのように遺伝子の発現パターンが変化するのか、あるいは休むとどうなるのか、研究室レベルではだんだんわかってきています。しかし、スポーツの現場で運動するたびに筋肉のサンプルを取るわけにはいかないので、たとえば汗に含まれる乳酸をはじめとした成分から運動の効果を推定できないだろうかと考えています。もちろん、わかっていないこともまだまだたくさんあるのですが、科学的な知見をアスリートが実際に生かせるようにすることこそ、僕の役割ではないかと思っています」

体育の実技の授業も持つ北岡は、今日もトラックを走り、ラボでピペットを握る。



東大大学院時代の恩師である八田秀雄教授との共著『乳酸をどう活かすか II』(杏林書院)。様々なスポーツ現場でどのように乳酸の測定データが活用されているのかを紹介する本の中で、「サラブレッドから考える高強度運動時の乳酸代謝」の章を担当した。

Hiroo Sekiguchi

1960年、埼玉県生まれ。1988年、神奈川大学大学院経済学研究科修士課程修了。博士（歴史民俗資料学）。2018年、神奈川大学外国語学部准教授。2020年、同大学国際日本学部准教授。

古文書との出会い

異星人の文字にしか見えないにしえの人々のくずし字を読み解き、日本近世の歴史の謎を名探偵の如く解明し、しかも美術修復士のような手さばきで傷んだ古文書を甦らせる技を持つ。

文学部史学科で学んだ大学2年の時のこと。日本史演習で古文書を使ったレポートの課題が出され、買ったばかりの一眼レフカメラをたずさえて訪れたのは北関東の図書館の郷土資料室。ある大名家の日記を撮影し、帰宅後、その写真をもとにくずし字を筆写してレポートを書き上げた。

「くずし字で書かれた古文書や古記録を読むようになりたくて、地方史研究会という学生サークルに入会したり、夏休みには独習書を読んだりしましたが、あの大名家の日記を読み解くのはたいへんでした。それでも史料が読めてくると、誰も知らない歴史の“かけら”が見えてくる。これは面白いぞ、と。そ

れで近世史を研究しようと思うようになったんです」

やがて、サークルの先輩たちがアルバイトをしていた日本常民文化研究所（以下、常民研）が神奈川大学の附置研究所になり、しかも憧れの網野善彦（1928～2004年）が教授、所員として着任したという情報をつかむと、関口は神大の大学院に入るが――。

「修士論文が書けなくて長いこと悩みました。網野先生は『難しいことを考えずに、史料を読んでわかったことを書きなさい』とか『ここがロドスです。ここで跳びなさい』とか叱咤激励してくださいました。常民研の共同調査の仲間たちにも支えられて、4年かかりましたが、何とか修士論文を書き上げました。僕の研究者人生にとって、常民研と網野先生はとても大切な存在なんです」

教科書をも変える下張り文書

石川県は奥能登^{おくのと}の旧家、時国家^{ときくに}。この家と常民研とのかかわりは1952年に遡り、常民研が神大に移管したのを機に、1984年から時国家調査が再開された。調査団長はもちろん網野、アルバイトとして大学院生の関口も参加した。最初の調査では、母屋から土蔵まで家探しして大量の古文書を発見した。破損した

FEATURE

古文書に秘められた 謎を解き明かす

古文書大国と言われる日本。
襖^{ふすま}や屏風^{びょうぶ}の下張りにも古文書が使われている。
下張り文書は過去から送られたタイムカプセルだ。
彼は今、そのカプセルの開封にいでている。

関口 博巨 准教授

国際日本学部
歴史民俗学科

日本近世史、
古文書の整理と修復

襖の破れ目からは下張りに使われた古文書が露出していた。

「襖や屏風の表面には書画が貼られています。その下には表面の作品を支えて仕上がりをよくするために、反古紙が何層も貼り込んであります。それを下張り文書といいます。時国家の共同調査では下張り文書も徹底的に調べました。下張りになっていなければ捨てられていたかもしれない古文書なので、これも貴重な史料なんです」

網野が主導したこの共同調査・共同研究から関口は、あの歴史の謎解きのダイナミズムを知ることになる。

「時国家は旧家とはいえ百姓身分でした。私たちが調査する前は、時国家は譜代下人を隷属農民として使役する古いタイプの大地主と見なされていたんですが、下張り文書を含む古文書群を調べていくうちに、時国家が大規模な廻船業や製塩業を手がけ、さらに鉛山経営にも触手を伸ばすなど、さまざまな事業を展開していたことがわかってきたんです。時国家の譜代下人の多くはそんな多角的な経営にふさわしい職能を有していて、とくに有能な者は支店を任されたりもしていました。時国家は実は地域経済を牽引する企業体のような存在だったわけです」

共同研究でのこの発見を、網野は『百姓＝農民ではない』と表現し、繰り返して主張した。日本史の根強い常識を覆そうとしたのだ。

「近世の日本社会は自給自足的な農業社会だと考えられてきました。ところが、山野河海に恵まれた地域には非農業的な社会が存在し、企業家的な家が形成され、下人のような奉公人が抱えられていたわけですから、簡単に百姓を農民、村を農村に置き換えることはできません。そもそも江戸時代に農民身分は存在しません。最近の日本史の教科書は、近世の身分別人口構成の80パーセント近くを占めていたのは農民ではなく百姓としていますし、他の研究の進展もあって、土農工商という言葉はあまり使われなくなっています」

共同調査によって革新的な研究が生まれる瞬間を、関口は身をもって体験したのである。やがて関口は、この時の経験を支えとして、瀬戸内海の「海の領主」と言われた^{ふたがみ}二神家の

研究などで、めざましい成果をあげていく。

南蛮屏風は海を渡ったタイムカプセル

時国家文書を整理する過程で関口は、他のメンバーとともに、東京大学史料編纂所古文書修理室の中藤靖之から古文書修復の技術を学んだ。

「虫に食われていたり、穴が開いていたり、水に浸かって劣化していたり、そういう傷んだ古文書を将来に残し、再び読めるようにするのが古文書修復です。熟練を要する繊細な修復の技術は、襖や屏風の下張りの技術にも通じています。私にできるのは調査と研究に必要な基礎的な修復だけですが、修復の経験が下張り文書を身近に感じさせていることは間違いありません」

関口はいま、研究代表者として「ポルト南蛮屏風の総合的研究による新領域の開拓」というプロジェクトをスタートさせた。ポルトガルはポルト市のソアレス・ドス・レイス国立博物館に保管されている南蛮屏風とその下張り文書を主な調査対象とする学際的研究である。

「屏風絵はもとより、作品を支える下張り文書、さらに下地の骨、それら全体を複合資料と理解して、中世史、近世史、民俗学、文化人類学、キリスト教史、情報学、船舶史、美術史、こういった分野の人たちに集まっていたら総的に研究してみようという試みです。下張り文書は18世紀の京都のお菓子屋さんのものでした。屏風絵自体はおそらく17世紀ぐらいのもの。骨はさらに古いものを再利用した可能性があります。これらがどのようにして一つの屏風になり、どのような人たちの手を経て、どのような経緯で日本からポルトガルへと伝わったのか。この屏風はいわば“海を渡ったタイムカプセル”なんです」

多くの人が利用できるように、このタイムカプセルを開き、2000枚にも及ぶと推測される下張り文書をデータベース化することがまずは求められている、と関口は言う。神大を超えて世界中の人々がアクセスできるようなデータベースを構築すること。それが自身に課せられた仕事の一つであると。



関口の著書、『古文書を学ぶ』（御茶の水書房）と『近世村落の領域と身分』（吉川弘文館）。後者には修士論文や能登調査の成果も収録されている。



海を渡ったタイムカプセル、ポルトの南蛮屏風下張り文書を調査する関口。

LABS

領域横断的でユニークな研究組織

アジア研究センター

学部や学問分野を越えた研究組織として設立され、アジアの総合的・学際的研究に取り組む。



アジア研究の成果として出版される研究叢書。これまで7巻が発行され、『アジアのグローバル経済とビジネス』が最新巻となる。

アジアを対象に学問の分野を越えて研究に取り組もうと2013年に開設されたのがアジア研究センターだ。山家京子所長は「神大のほとんどの研究所が学部にも所属する形になっていますが、このアジア研究センターと日本常民文化研究所は領域横断的な研究所として特徴的な位置づけになっています」と次のように語る。



『神奈川大学アジア・レビュー』と『CAS News Letter』という冊子も定期的に刊行。これらはアジア研究センターのホームページで、PDFによってだれもが読むこともできる。

「私が属している『アジアの社会遺産と地域再生手法』という共同研究では、建築が専門の私はやはり都市計画や建築などハードからアプローチするのですが、他の先生は援助のあり方や自治組織の設立などの面からアプローチしたりするなど、研究の幅が非常に広がっていきます。文系や理工系のいろいろな視点がレイヤーのように重なり、立体的なものが見えてくる。そういうところがアジア研究センターの醍醐味ではないでしょうか」

また『植民地国家と近代性：アジア諸国を中心とする比較研究』という共同研究では、沖縄のアイデンティティなどアジアを主としながらも、アフリカやラテンアメリカも視点に加えられており、「パースペクティブの効いた厚みのある研究」になっていると山家所長は言う。

現在、7つの共同研究が進行中で、研究が区切りを迎えた時には叢書という形で研究成果が出版される。叢書はすでに7巻が発行されている。

「今後はアジアの大学の研究者たちとの共同研究や交流、あるいは国内のアジア研究機関との情報交換などにも力を入れ、ユニークな媒体としての役割も果たしていきたいと思っています」(山家所長)

注目の若手研究者 雨宮 有里

人間科学研究科
博士後期課程3年

心に傷を負った 人への思い

不公正な扱いを受けている人や
心の傷を負った人たちへの共感から
その傷を癒やすための貢献をしたい。
それが彼女が学ぶことの原動力だ。

東京学芸大学で修士課程を、東大大学院で博士課程を終え、いくつかの大学で講師としてすごした10年の後に、神奈川大学大学院で再び研究を始める。

「もともと臨床心理の分野、とくにPTSD（心的外傷後ストレス障害）のフラッシュバックに関心がありました。基礎的な研究は東大でおこないましたが、どうしても臨床の分野で研究がしたくて、臨床に強い神奈川大学で学ばせていただこうと思ったんです」

高校生の頃から心理学に興味があり、ホロコーストを生き延びた人々や、当時勃発した地下鉄サリン事件の被害者の方々がフラッシュバックで長年苦しんでいることを知ったことがそもそものきっかけだった。

「とても保守的な地方に育ちましたので、女性や外国人たちが差別を受けるのを見てきましたし、学生の頃には不登校の子の家庭教師を続けていたこともあり、不公正な扱いを受けている人や社会的立場の弱い人たちの力になりたいという気持ちがずっとありました」

そんな雨宮ゆえ、レイシズムを扱ったものなど、社会性を帯びた論文も数多い。中でもこのフラッシュバックの研究を続けるのは、PTSDの患者さんたちの治療になんとか貢献したいという思いからだ。その研究も一区切りが付き、2022年の秋には博士課程を卒業する予定だ。



「その後は、科研費をいただいたテーマの研究をします。才能は生まれつきで努力しても変わらないと思っているか、それとも努力次第で伸びるものか。どちらのマインドセットをどのように支援することで学習意欲が伸びるのか。そういった研究です。もちろん、フラッシュバックの研究は今後も続けていきます」

同業の夫がサポートティブなのが嬉しいと、雨宮はほほ笑みながら付け加えた。

Yuri Amemiya

1977年生まれ。2001年、東京学芸大学卒業。2004年、東京学芸大学博士前期課程修了。東京女子大学常勤など複数の大学での講師経験を経て、2019年、神奈川大学人間科学研究科博士後期課程入学。

ことばの謎と 驚異に挑む

人はだれでもなぜ一つのことばを操れるのか。
ことばを用いて
いかにコミュニケーションが可能であるのか。
ことばには多くの謎が潜む。

武内 道子

名誉教授
理論言語学

言語機能はレントゲンに映らない

実は当たり前すぎて、誰も考えてみようともしないことにこそ、謎はまるで深淵のような口を開けている。

「人間であればだれもが4、5歳までに一つのことばをマスターします。しかも、いかなる言語も獲得できます。両親が日本人でもニューヨークに生まれれば、子どもの母語は英語になり、中国人と日本人の間に生まれた子どもがアラビアの砂漠に生まれ育てばアラビア語が母語になる。この事実をどう説明するかなんです」

人はいかにことばを覚え、話せるようになるのか。「当たり前」のことゆえに、なかなか学問の対象になり得なかった。

「呼吸に必要な肺や、消化に必要な胃と同じように、言語機能という心的オーガン(器官)を人は持って生まれると仮定せざるを得ないんです。それはブラックボックスなんて呼ばれますが、人は生まれ落ちた瞬間にそのブラックボックスがカタカタと動き出すんです。ただ、そのためには刺激としての発話が必要。ことばを耳にしないとイケない。その結果、生後数年でさまざまな言語環境の中で白くな

ったり、赤くなったり、青くなったりと個別文法に変化する。だから、狼に育てられた人は、後に人間社会に戻されてもなかなかことばを学べないんですね。そして、そのブラックボックスはレントゲンには映らない」

見えないものを対象とする点では、言語学は理論物理学や数学に似ていると武内は言う。言語学の中では、言語知識の構造的側面(文法論)の研究は進化し、成果もある。もう一つの側面が語用論で、人がことばを使って「意味」を伝え合うことの根源的な仕組みを探ろうとするもの。その語用論における先端理論が関連性理論で、武内は日本におけるその第一人者である。

「たとえば一人の学生が『きょう、飲みに行こうか?』と言い、相手の学生が『明日、試験なんだよ』と言ったとします。誘った方は相手が断りのことばを一言も使っていないにもかかわらず、断られたと瞬時に理解します。加えて『帰ったら勉強する』『試験が終わったら飲みに行こう』とも聞き手は解釈するでしょう。そんなふうには、話し手が伝えようとしている情報量は、ことばにしたことよりもはるかに多い。ことばで伝えようとした意味とことばにしなかったが伝えようと意図した

Michiko Takeuchi

1962年、日本女子大学文学部英語英文学専攻卒業、1968年、国際基督教大学大学院教育学研究科(英語教育専攻)修了。1972年、アメリカンディアナ大学大学院言語学専攻修了。1988年、埼玉工業大学助教授、1990年、神奈川大学短期大学部教授、ユニバーシティカレッジロンドン(UCL)言語学専攻客員教授などを経て、2000年、神奈川大学外国語学部教授。2010年、神奈川大学名誉教授。

意味とが大きく乖離していて、後者の情報量
ははるかに大きく、伝達できている。しかも
意識せず瞬時に。このことをどう説明するか
ということが語用論の課題であり、これを支
配している原理を人間の認知に求め、認知科
学の理論として確立したのが関連性理論なん
ですね」

発話から解釈までの長い道のり

「人間というのは知らないことを知りたい、
あやふやなことはちゃんとフィックスしたい、
間違っていることは訂正したい。こういう自
分の認知環境（知識などの集合）の変化と改
善を求める動物です。そのためには変化や改
善の効果は大きければ大きいほどよく、同時
にあまり労力は使いたくない。この二つの原
則が交わったところを最適関連性と呼び、人
はここを目指して発話解釈にあたるのです。
だからああでもないこうでもないといろんな
解釈をするなんてことはやってないんですね」

「最小労力」で「最大効果」をあげる解釈が
得られるよう話し手は発話を作る。すると人
間の言語使用のブラックボックスともいっ
べき「関連性の原理」が聞き手においてカタ
カタ動く。いや、そのスピードを考えれば、「カ
タカタ」ではなく「ピュッ」というべきか。

「この関連性の原理というものを人は心の
中にもって生まれてくると仮定しています。文
構造を操る認知システムとは別に、この関連
性の原理を操る認知システムがあるのでは
ないか。人の心を読む力の表れであるような、
発話解釈を律している認知システムがあるの
だと考えているんです」

ここに存在する深淵に気づかないと関連性
理論の真のすごさはわからない。武内の著書
『手続き的意味論』に、《言語的に構造化され
ている意味から、伝達されている思考への長
い道のり》というロビン・カーストン教授（ロ
ンドン大学の関連性理論の研究者）の言が紹
介されている。発話解釈はことばの意味を下
敷きにして伝えられる「オモテ」の意味と、
ことばにしなかったが伝えたいと意図した言
外の「ウラ」の意味の合わさったもの。その
「長い道のり」は、私たちの日常コミュニケ
ーションの場ではひとかたまりで、瞬時に過

ぎていく。それこそが「認知的謎」であり、
人間の驚異なのだ。

コンピュータは人間を超えられない

英語教師になりたかった武内は大学卒業後、
都の公立中学校教諭としてその夢を叶えるが、
1964年の東京オリンピックで通訳の機会を
与えられ、その職をやめてしまう。

「オリンピックが終わると、勉強をまた始め
たいと国際基督教大学に入ったんですが、そ
こで井上和子先生に出会うんです。言語学の
革命児チョムスキーのもとで博士論文を書い
たアメリカから帰ったばかりの先生で、颯爽
として、英語半分日本語半分で講義をして、
板書する姿にも見とれるくらい憧れてしま
いました」

それが当時まだ新しい言語学との出会いだ
った。やがて武内は研究を深めたいとメリ
カのインディアナ大学大学院へ。新婚早々で、
MBA取得を目指す夫との二人三脚の留学だ
った。武内が神奈川大学で教鞭を執りはじめ
て数年後、ロンドン大学で在外研究の機会が
与えられ、そこで関連性理論の洗礼を受ける。

「ロンドン大学のデアドリ・ウィルソン先生
は関連性理論の創始者で、先生の来日時に私
がコーディネータを務めたご縁から留学を引
き受けてもらい、ウィルソン先生の薫陶を受
けた人たちともたくさん交流できました。こ
とばに関心をもったきっかけが井上和子先生
なら、育ての親はウィルソン先生ですね」

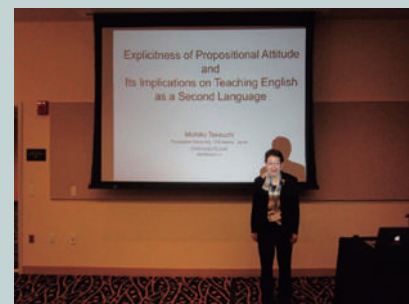
関連性理論は、生命科学、AI、さまざまな
学問の領域を横断し、その影響が期待されて
いるが、武内は「人間の持つ言語能力、発話
解釈能力をコンピュータは決して超えられま
せん」と語る。

「ことばを持つこと自体驚くべきことですが、
もっと驚異に値するのは、不完全で断片的な
言語表現を使いながら、無限とも言える思考
を伝達しようとし、それが成功裏に終わると
いう事実です。人間はどんなにすごいことを
しているのかを、自分の言語生活の中で立ち
止まって観察してほしい。それが私に研究を
かき立てる源泉でもありますね」

間違いなく武内は神奈川大学の誇りであり、
宝石である。



ロンドン大学留学から帰国した武内
は、『英語青年』に3回にわたって寄
稿した論文によって関連性理論学者
としての地位を確立する。



2014年、アメリカのUCLAで開催さ
れた第2回アメリカ語用論学会の国
際会議で発表をおこなう武内。

国策紙芝居

戦意高揚のために利用された大衆メディア——国策紙芝居。
非文字資料研究センターの収集によりその研究が一気に進んだ。



1930年代後半より戦時中にかけて、戦意高揚のために作られたのが国策紙芝居である。その全体像の解明は敗戦にともなう原資料の散逸もあり困難であったが、非文字資料研究センターが2012年秋、神田の古書市場から国策紙芝居コレクションを購入することで、その研究が一気に進んだ。

「全国の研究者に向けて所蔵情報を公表するために、資料の整理を進めるとともに、デジタル・アーカイブの構築、学生サークル・放送研究部の朗読による音声データ化も始めました。同時に安田常雄先生をチーフとする共同研究もスタートしました」と元・事務局の原田広が語る。

共同研究チームの成果は2018年に『国策紙芝居からみる日本の戦争』(勉

誠出版)という一冊にまとめられた。241点の国策紙芝居をフルカラーで紹介し、研究チームの論考、そして原田がまとめた全国の国策紙芝居の所蔵先リストが収められたこの大部の書籍は大きな話題となった。安田が語る。

「この本が世に出たことで、日本各地からさまざまな情報が私たちのところに寄せられるようになり、それに基づいて、私たちもさまざまな地域の調査を進めてきました。一般に、戦中には1000～1500点の国策紙芝居があったのではと言われますが、その全貌も少しずつわかってきました。それは、戦意高揚やプロパガンダのためにどのように利用されたかということだけではなく、国策紙芝居を通して、戦争中の地域における人びとの生活状況や意識の

あり方なども含めて、その実像の一端が浮かび上がってきます。研究班では、いまその最新の成果を『続編』として、新たな書籍としてまとめているところです」

近年では、紙芝居研究は、海外でも盛んになっており、米国のスタンフォード大学など、海外からの研究協力の申し出もあるという(近刊では、Kaoru Ueda ed. “FANNIG THE FLAMES: Propaganda in Modern Japan”, Hoover Institution Press, Stanford University, 2021)。戦時下の厳しく規制された表現活動や大衆メディアの実相を伝える貴重な“非文字資料”として、国策紙芝居はいまもセンターで調査・研究が進められている。